

# 公益社団法人いわき青年会議所 2018年度 理事長総括

公益社団法人いわき青年会議所 理事長 蛭田 啓一

2018年度基本方針に沿って総括する。

## 【強い組織づくり】

本年もいわきJCは、JCが持つその特性を活かしながら、これまでの流れを重んじつつ時代背景と照らし合わせながら組織運営を行ってきました。我々の活動は1年という限りある期間内での活動ではありますが、ただ単に1年限りのサークル活動として終わらせるのではなく、運動としてこれまで築き上げてきた努力一つひとつの結晶をより磨き上げ運動を深化させなければなりません。その為には、これまでの流れと経緯を踏まえ、新たな主観を持ちつつも物事を進めていく必要がありますが、本年は、特にJC経験も少ない会員も多いことから、全般的にこれまでの流れを継承ができる人財が豊富であった年ではありませんでした。年々と在籍年数の多い会員は少なくなり一方で、これまでの運動の流れを知る人財が少なくなる状況ではありますが、特に本年は若手の理事も多かったことから今後に向け、経験豊富な人財が増えていくことが期待できます。そして、会員や地域、市民の方々から信頼と負託に応じていく盤石な組織運営を行われることを切に願っております。また、本年も多数の新入会員を迎えることができました。特に今年は定例となる行事とは別に、さまざまな行事に出向く新入会員も多く見られる他、活気に満ち溢れる姿が多々見られました。そのようなことから、今後の地域といわきJCを背負っていくたくましい人財として大きく成長していくことに期待を持ちながらも、会員同士が協力し切磋琢磨し合いながら、決して自己満足には浸ることなく地域の本質を見極めた運動を行っていくことを期待しています。

## 【たくましいまちづくり】

東日本大震災から7年が経過し復興が道半ばにある今、これからのまちづくり運動を進めていくには、今後の社会情勢は把握して行動に移していかなければなりません。今後もさらに加速していくことが予測される「少子高齢化」や、県内においても顕著である若者の「人口流失」という社会問題は優先的に捉えて運動を展開していく必要があります。さらには、今もなお、避難を余儀なくされた多くの方達がいわきに住まわれている中で、今後いわきが将来へ栄えていく街として何を通して徳を得ていくのか模索していく必要があります。その為にも、「地方創生」といわれる考えをより深めていくことが本年のポイントでありました。これは前年度からも続いてきた流れもあることから、さらに考えを深め会員に定着を図った年であったと考えておりますが、しかし、特に勉強する機会も例会以外に無かったことから、実際に会員一人ひとりがきちんと認識し会全体に定着が図れたかという懸念が残ります。何よりも、それらの運動を行っていく上

で必要な知識を習得する機会を持つ事が出来なかったのは、市民の信頼と負託に応えていく組織を目指す以上必要なことでありながらも、提供が出来なかったことに反省を残すことになりました。「少子高齢化」や「人口流失」がもたらす将来への問題は、もはや他人事では済まされない状況にあることから、今後もより危機感を持った運動を構築していく必要があります。

そして、本年も「フラ」をいわき独自のものとして定着していくために一年を通して活動して参りました。残念ながら、本来目的としていたものとは予定が崩れての運動展開となってしまいましたが、努力の貝もあり、「フラ」の運動が踊りのみであったこれまでの概念からは外れ、他の面で魅力づけられる「フラ」に取り組むことができた重要な一年であったと考えております。

また、独自の文化として活かしながらも、いわき「シティセールス」としても一貫を持ち事が出来たことから経済発展への一助としての味方を深めることが出来ました。そのようなことから、今後も「フラ」が、これまでの概念を飛び越え幅広く展開していくことを期待しています。

#### 【協働によるまちづくりへの取り組み】

本年は、いわきJCがいわきFC・いわき市・いわき市商工会議所や関係諸団体と連携の下で行った共同宣言をきっかけに「スポーツ地域活性化委員会」を立ち上げました。スポーツは、エンターテインメントとしての集客力と産業の成長に期待が持てることから、その可能性を十分に引きだし、ゆくゆくはスポーツが経済の発展に資していくことに期待を持っています。その為には、まず本年は、その前段にある地域が活性していくことへ注力しました。そして、そこに至る為への仮説を立てることを目標に一年の活動に臨みましたが、ある程度の仮説を立て経済に資していくためのロジックを立てることができたものの、根拠となるデータはほとんど無く、調査を深めることが出来なかったことから、それらの考えも時期尚早となり大きな成果は得られなかった結果となりました。スポーツを通しての地域活性は、共同宣言の活動にとらわれることなく、各地域が単体で独自性のある行動ができるようになることが、地域活性の一步に繋がると考えております。まずは地域と人がより身近に感じられる環境を創ることが大切であると思っています。そのためには、スポーツというツールを十分に活用し、市民の日常の中に定着を図っていくことが今後の運動の中で特に必要なことです。それら仮説を確かなものとして運動を展開していくためには、本年見出した仮説を検証し、さらなる調査を深めていかなければなりません。そして、いわきJCに定着する事業を目標に運動を構築していくことを期待しています。さらには、未だスポーツと街の考えが深められてない今、対内だけで論ずることだけではなく、対外の団体も交えて議論を深めていくことが必要です。そして、本年開催した事業をベースに次年度体制がさらに深化した事業を開催できることに期待をしています。

#### 【次代を担う子ども達へ】

少子高齢化が一層進む我が国において、これから社会を担う子ども達に対して健全な育成を

行うことは最も大事な取り組みの一つと言っても過言ではなく、いわきJ Cも発足以来唯一継続してきた運動の一つでもあります。そのような中で本年も、将来の社会においても十分に適応できる子ども達の精神的育成は必須でもあることから、小学校高学年を対象に自主性を養う事業を開催させていただきました。しかし、単に自主性とはいっても、それに至るためには、ロジックとさまざまなプログラムが必要になります。それらを構築するには、子ども達の現状とニーズを調査し考えを深めなければなりません。その努力で得た知識やデータは、会員にとっても大きな活力源となり、今後の組織運動に続く財産となる訳ではありますが、残念ながら残せるデータは少ない結果となりました。毎年、青少年運動を行う上で目的は同じでも視点や切り口はオリジナルな考えがあっても良いものです。しかし、オリジナリティーを求めるにしても、これまでの流れと重視してきたものを共有することは必須なことです。これまでの継承が不足していたことも大きな要因と考えられます。また、我々メンバーが子ども達と関わる上でも、子ども達のことは誰よりも知識多いものとして関わらなければなりません。知識に欠けていながらも接していたのが現状であり、教養づける側として至らぬ部分も多く反省を残すことも多々ありました。そのようなことから、次年度以降は専門化からの監修や会員の研修を必要とすることをお勧めします。また、本年は、昨年の活動に続き「家訓プログラム」と新規事業として、「未来いく」を開催しました。実施回数は予定よりかなり少なかったものの、本年は、対外の協力者を特に頼ることなく単独での開催することができました。これらの運動は、通年対象している小学高学年に留まることなく、大学生や子ども達の親を対象として開催できたから、これまでない対象者とやり取りをすることができ、青少年に対する新たな主観を見出せたことは本年の成果です。次年度以降も幅広い対象とやり取りを重ね、会員が多くの知識を得て、青少年に対しての考えをより深めていけることに期待しています。

#### 【出向者への支援】

本年は福島ブロック協議会へ12ぶりに会長を輩出する年として、いわき青年会議所の運動の推進とは別に、出向者を支援するという大きな目標がある年でした。まずは、会長輩出LOMとして、いわきJ Cが出向者をバックアップしていくということに、会員に対して理解を示すことが必須でありましたが、結果的に我々上層部の落とし込みも悪かったせいか全般に理解が示しきれない結果となりました。特にブロック関係の大会へ出席には力入れていかなくてはならない状況ですが、毎度、参加数は目標には達することがなく、動員に苦労した一年でありました。確かに、時間や金銭面においては負担をかけてしまうこととなりますが、組織で事を進めていく以上はそれに従って行動していくことも組織人としては必要なことであります。しかし、そのような中でも、率先して協力してくれた会員も多々ありその勇気ある行動には感謝が尽きません。来年に至っては、ブロック大会を主管する立場として、会員に対しては益々とその意図も理解してもらうことは必要です。そして、華やかな大会を目指すためにも、さらなる組織力の強化は必須でありながらも、誰もが自分の事だけを優先することではなく、組織人として優先すべきものを考え、それを調